

施設実習における実習施設種による学びの差異

松 藤 光 生 中 村 恭 子

The Differences of Learning through Practice Training in Different Types of Welfare Facility

Mitsuo Matsufuji Kyoko Nakamura
(2015年11月27日受理)

1. 問題と目的

2015年4月より子ども子育て支援新制度が本格施行される中、待機児童解消のための保育士確保が早急の課題とされているが、それと同時に保育の質、並びにその保育を担う保育士の質の向上も重要な課題となる。保育士養成課程においては、様々な専門科目の履修が求められる、その中でも実習科目の履修は必修となっている。実習においては、保育所での実習に加え、保育所以外の児童福祉施設や障害者支援施設等での実習（以下、施設実習）が必要となる。この施設実習、そして施設保育士に関して、保育士資格を目指す学生の多くは、保育所での保育士として働くことをイメージしており、他の児童福祉施設や障害者支援施設での保育士をイメージしておらず、施設での就職を希望していないことも多い（大和田ら、2014；多田内・重永、2014）。しかし保育士とは、「専門的知識及び技術をもつて、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者」（児童福祉法第十八条）である。ここでいう児童とは18歳未満の全ての児童、すなわち障害児や要保護児童が含まれており、保育士資格を有する上では、それらの児童に対して専門的な保育を実践出来ることが求められる。そういった状況において、施設実習は、学生の施設に対する理解や意識を変え、多様な発達段階や状況にある児童を理解し、専門性を高める上で非常に重要な機会となる。多田内・重永（2014）や土谷（2006）は、施設実習を経ることで学生の施設に対する意識や就職の希望に変化が生じたことを報告しており、藤重（2014）は、施設実習において学生が直接的な援助方法や利用者児の特性理解など多くの面で学びがあったことを報告している。また山口（2007）は、実習前後で学生の自己効力感といきがい感が肯定的に変化したこと

を報告しており、学生にとって施設実習経験が多様な面で影響を与えることが考えられる。この施設実習で対象となる施設は、表1に示されるように多様な種類となっているが、学生が実習で体験出来る施設は、多くの場合一つないしは二つとなっていることが現状である。施設種によって接する児童の年齢や特徴、実習内容が異なっており、そこの学生の体験や学びも大きく異なっている。土谷（2006）は、実習中の指導内容の差について、「障害児系施設では、医療との密接なかかわりがあり、治療、リハビリテーション、訓練等が中心となり、保育士だけでなく医療を基盤に様々な職種の人が多く働いており、受け入れ準備、日誌の指導、個別の指導助言があまりできていなかったのであろう」と実習施設の特徴により指導の内容に差が出ることを考察しており、また石山ら（2010）は、施設種により学生の実習の「自己評価」や「気づき」に相違が見られたと報告している。保育士の質を高める上では、全ての児童福祉施設やそこで求められる技術、知識について十分に理解することが必要になる。そのように考えた場合、質の高い保育士の養

表1 施設実習の主な実習先

施設種	概要
乳児院	主に2歳までの乳児を保護者に代わって養育する施設
児童養護施設	主に2歳～18歳の児童を保護者に代わって養育する施設
母子生活支援施設	母子に生活環境を提供すると共に自立の支援を行う施設
情緒障害児短期治療施設	情緒障害を抱える児童を入所させ、治療と共に自立の支援を行う施設
児童自立支援施設	子どもの行動上の問題、「環境上の理由により生活指導等を要する児童を入所させ指導と自立の支援を行う施設
障害児入所施設	知的障害、肢体不自由、視聴覚障害等を抱える児童を入所させ、必要な治療、生活の支援、機能訓練等を行う施設
児童発達支援センター	知的障害、肢体不自由、視聴覚障害等を抱える児童（主に幼児）を通所させ、必要な治療、生活の支援、機能訓練等を行う施設
障害者支援施設	18歳以上の障害者を入所させ、日常生活、社会生活を支援する施設
指定障害福祉サービス事業所	18歳以上の障害者を通所させ、日常生活支援や就労支援、自立に向けた支援を行う施設

成を目指す上で、それぞれの実習施設における体験や学びについて把握しておくこと、そしてそれを踏まえた事前・事後指導を行っていくことが重要になると考えられる。

事前指導の中では、実習の意義・目的・心構え等を理解させていくことと共に、実習施設について理解させていくことも重要となる。その際にも施設実習では、実習を行う施設が多様であるため、それぞれの施設について理解を促すことが必要となる。加えて事後指導においても多様な施設で実習を行い、そこで得た様々な経験や学びについてふり返りや反省を行わせることが必要になる。池田ら（2013）は、施設実習の学びが学生により相違があることを示した上で、「事後指導を含む施設実習後の教育に関しては、学生の施設実習での学びのふり返りをしっかり行うことと各学生の学びの共有を図ることを教員が意識する必要がある」と述べている。このように、異なる実習体験や学びについて、学生間での報告を行わせ、その共有を行わせることにより、自身が実際には実習を行っていない施設についても理解を深めることが可能になると思われる。しかしそういった実習の報告会や実習体験の共有を行う際にも、それぞれの実習施設において学生がどのような体験や学びを得ることになるのかについて把握しておくことは重要になると思われる。

以上より本研究では、多様な施設種がある施設実習において、施設種による学びや体験の差異を明らかにし、質の高い保育士養成のための学生指導の知見を得ることを目的とする。

2. 方 法

(1) 調査対象

A大学、保育士資格取得希望の4年生、118名

(2) 調査内容

①フェイスシート

学生番号、実習先施設種。学生番号については、実習先施設との正誤を確認するためだけに用い、分析を行う上では、個人の特定は行っていない。また実習先施設に関しては、乳児院、児童養護施設、母子生活支援施設、障害児支援施設の4グループに分けてその後の分析を行った。ここでいう障害児支援施設には、知的障害、肢体不自由、視覚障害、聴覚障害、重症心身障害のそれぞれを主とした対象とする障害児入所施設、知的障害、肢体不自由を主とした対象とする児童発達支援センターが含まれる。なおそれぞれ施設種に実習に行った人数は、乳児院28人、児童養護施設54人、母子生活支援施設16人、障害児支援施設20人で

ある。

②実習前後での施設イメージの変化

実習前後での施設へのイメージの変化を問うために、「①児童福祉施設に対するイメージが肯定的に変わった」「②保育所以外の施設への就職を考えるようになった」の2項目を「①全くそう思わない」～「④とてもそう思う」の4件法で回答を求めた。

③利用者の理解

施設利用者の理解について問うために、「①障害児に対しての理解が深まった」「②社会的養護の対象となる子どもについて理解が深まった」「③保護者支援のあり方について学ぶことが出来た」の3項目を「①全くそう思わない」～「④とてもそう思う」の4件法で回答を求めた。

④実習学習尺度

実習における学びの内容を測る尺度として、実習学習尺度を作成し使用した。作成にあたっては、土谷（2005）、藤重（2014）等を参考に実習での学びについて問う質問15項目を作成し、「①全くそう思わない」～「④とてもそう思う」の4件法で回答を求めた。

(3) 調査時期

実習終了後第1回目となる実習指導の授業の中で実施をした。実習時期が学生によって異なるため、実習終了から1か月程度経過している学生もいれば、直前まで実習があった学生もいる中での実施となった。

3. 結 果

(1) 実習学習尺度の因子分析

実習学習体験尺度の15項目に関して、因子分析（重み付けのない最少二乗法、プロマックス回転）を行った。因子負荷量3.5を基準とし、全ての因子に対して基準を下回る4項目を削除して、再度因子分析（重み付けのない最少二乗法、プロマックス回転）を行った結果、解釈可能な3因子が抽出された。それぞれの因子に負荷量の高い項目を中心に命名を行い、第1因子は「利用児者との関わり・直接的援助」、第2因子は「保育士からの指導」、第3因子は「実習施設の理解」と命名した（表2）。

(2) 実習施設種による学びの差異

実習施設種により学びや体験に差異があるかを検討するために、実習施設種を独立変数、実習学習尺度のそれぞれの因子得点を従属変数とした1要因の分散分析を行った。結果、「利用児者との関わり・直接的援助」と「保育士からの指導」に関して有意差 ($F_{(3,114)} = 4.38, p < .01$; $F_{(3,114)} = 10.57, p < .01$) が認められた。Tukey

表2 実習学習尺度の因子分析結果

第1因子: 利用児者との関わり・直接的援助 ($\alpha=.726$)	因子負荷量		
利用児者への声掛け等の関わり方を学ぶことが出来た	.824	-.086	-.036
利用児者と直接関わる時間を多く経験出来た	.724	-.003	-.098
実習施設での保育士の業務内容について学ぶことが出来た	.491	.144	.153
利用児者と良い関係性が築けた	.488	-.042	.020
第2因子: 保育士からの指導 ($\alpha=.688$)			
指導担当等に質問をする機会が多くあった	-.130	.928	-.093
指導担当等の保育士との関係は良好だった	.035	.525	.179
保育士より支援方法等について直接的な指導の機会があった	.344	.431	-.111
実習施設での他職種との連携について理解出来た	.007	.397	.093
第3因子: 実習施設の理解 ($\alpha=.579$)			
実習施設への理解が深まった	-.050	.016	.716
施設養護の社会的役割について理解出来た	-.092	.006	.541
利用児者が必要とする支援内容について理解出来た	.246	.005	.421

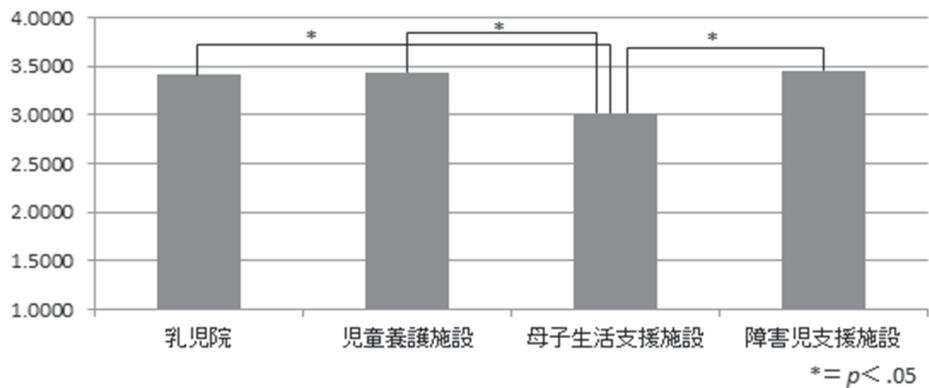


図1 施設種による利用児者との関わり・直接的援助の差

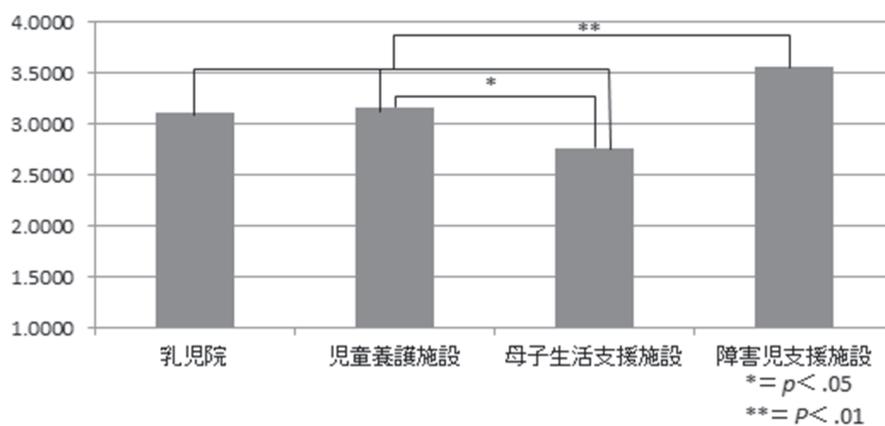


図2 施設種による保育士からの指導の差

による多重比較を行ったところ、「利用児者との関わり・直接的援助」に関しては、母子生活支援施設と比較して、他の3施設が有意に高い ($p<.05$) という結果が、「保育士からの指導」に関しては、他の3施設と比較して、障害児支援施設が有意に高く ($p<.01$)、児童

養護施設と比較して、母子生活支援施設が有意に低い ($p<.01$) という結果が得られた (図1, 2)。

(3) 施設へのイメージ変化と実習施設種による施設へのイメージ変化の差異

施設へのイメージ変化に関して、全体の傾向を把握す

るためにそれぞれの回答の選択割合を算出した。結果、「①児童福祉施設に対するイメージが肯定的に変わった」に関しては、94%が「そう思う」か「とてもそう思う」を選択していた。また「②保育所以外の施設への就職を考えるようになった」に関しては、「全くそう思わない」と「そう思わない」を合わせた割合と「そう思う」と「とてもそう思う」を合わせた割合がそれぞれ50%となっていた（図3、4）。

次に実習施設種により、実習後の施設へのイメージ変化に差異があるかを検討するために、実習施設種を独立変数、イメージ変化を問う項目2項目それぞれを点数化したものを従属変数とした1要因の分散分析を行った。

た。結果、「①児童福祉施設に対するイメージが肯定的に変わった」に関して有意な差が認められた（ $F_{(3,114)} = 2.97, p < .05$ ）。Tukeyによる多重比較の結果、母子生活支援施設と比較して、児童養護施設の方が有意に高い傾向（ $p < .10$ ）が、障害児支援施設の方が有意に高い（ $p < .05$ ）という結果が認められた（図5）。

(4) 実習施設種による利用者の理解の差異

実習施設種により、利用者の理解に差異があるかを検討するために、実習施設種を独立変数、利用者の理解を問う項目3項目それぞれを点数化したものを従属変数とした1要因の分散分析を行った。結果、「①障害児に対しての理解が深まった」と「③保護者支援のあり方

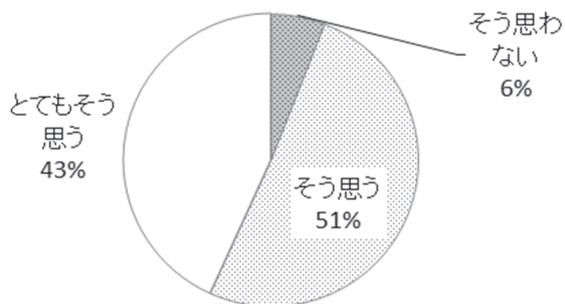


図3 施設への肯定的イメージ変化

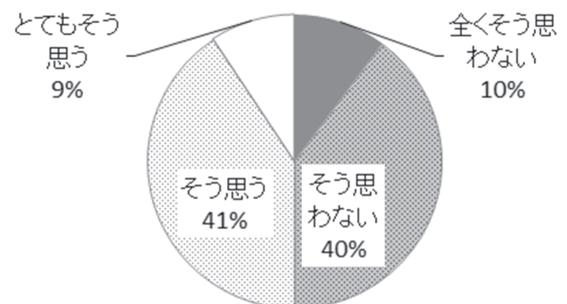


図4 施設への就職希望

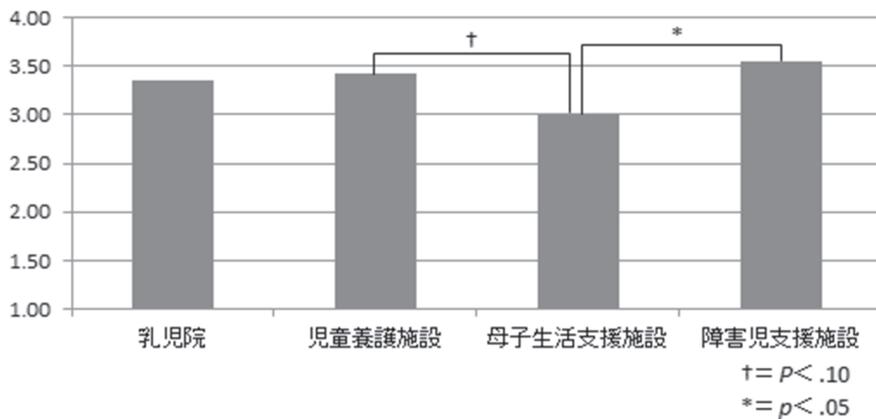


図5 施設種による肯定的なイメージ変化の差

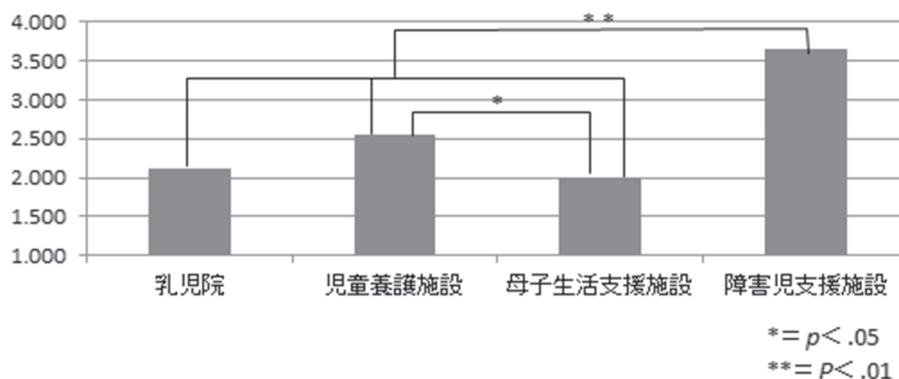


図6 障害児に対しての理解の差

について学ぶことが出来た」に関して有意な差が認められた ($F_{(3,114)} = 22.27, p < .01$; $F_{(3,114)} = 4.26, p < .01$)。Tukey による多重比較の結果、「①障害児に対しての理解が深まった」に関しては、他の3施設と比較して、障害児支援施設が有意に高く ($p < .01$)、児童養護施設と比較して、母子生活支援施設が有意に低い ($p < .05$) という結果が得られた。「③保護者支援のあり方について学ぶことが出来た」に関しては、児童養護施設と比較して、母子生活支援施設が有意に高い ($p < .01$) という結果が得られた (図6, 7)。

4. 考 察

(1) 実習施設種による学びの差異について

分析の結果、「利用児者との関わり・直接的援助」に関しては、母子生活支援施設と比較して、他の3施設がより体験し学んでいるという結果が得られた。これに関しては、母子生活支援施設の施設としての特性が影響していると思われる。母子生活支援施設は、施設内に保育室があり、施設利用家庭の幼児をその保育室で保育している施設もあれば、地域の保育所を利用する形を取っている場合もあり、後者の場合、日中は施設内にほとんどの子どもがいないという状況になる。同様の状況は、児童養護施設や障害児入所施設でも生じ得るが、それらの施設が宿泊での実習であり下校後の児童と関わる時間が持てるが、母子生活支援施設の実習の場合、通勤での実習が基本となるため、下校後の児童と関わりを持つ時間も短くなってしまいうため、このような結果になったと思われる。

次に「保育士からの指導」に関しては、まず障害児支援施設が他の施設よりも高いという結果が得られている。実習に行く学生の多くは、障害児者との関わりを経験が多いとは言えず、知識としては理解していても実際の関わりの上では困難な点も多く存在したと思われる。だからこそ保育士からの直接的な指導も多くなったので

はないかと推察される。また実習の内容として、障害児支援施設では設定保育を行う場合も多いが、他の施設では設定保育を行わない方が多いため、そういった面でも直接的な指導や相談の機会が多く持たれていると思われる。加えて石山ら (2010) が言うように「受け入れ態勢や実習内容、スケジュール等に関して柔軟に対応できる許容量が反映している」とも考えられる。しかしこの点に関して、土谷 (2006) は、障害児系施設では逆に受け入れ準備があまり出来ていない可能性を述べており、これは障害児支援施設であっても、主とする障害種による違いや通所か入所かという施設の形態による違いが影響すると思われる。また「保育士からの指導」に関しては、母子生活支援施設よりも児童養護施設の方が高いという結果も得られている。これに関しては、一点は前述したように母子生活支援施設では児童のとの直接的な関わりが少なくなってしまうことが影響していると思われる。もう一点としては、職員、しかも保育士資格を有する職員の数も影響しているのではないかとと思われる。児童養護施設には、職員が子どもの養育を行うため多くの保育士資格を有する職員が在籍している。一方で母子生活支援施設では、基本的に子どもの養育は母親が行い、職員はその母親・家庭の支援をするという特性上、元々の職員配置も少なく、また保育士資格を有さない職員も多いため、どうしても実習中の保育士からの指導の機会は少なくなってしまうと思われる。

(2) 実習施設種による施設へのイメージ変化の差異について

結果として、94%の学生が実習を経て施設へのイメージが肯定的に変化していること、50%の学生が施設への就職希望を考えていることが示された。これに関しては、土谷 (2006) や多田内・重永 (2014)、大和田ら (2014) の研究の結果と同様の傾向を示しており、実際に施設の現場に入ることにより、やりがいを感じることや利用児者の理解などに繋がっていると思われる。また分析の結果、母子生活支援施設へ実習に行った学生

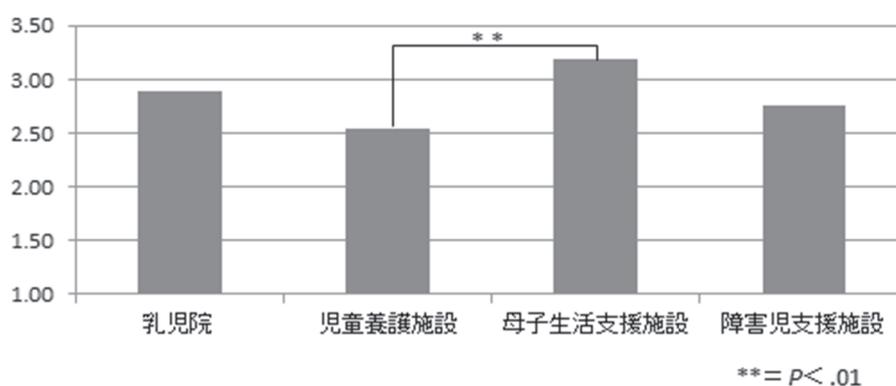


図7 保護者支援の理解の差

と比較して、児童養護施設と障害児支援施設に実習に行った学生の方が児童福祉施設へのイメージがより肯定的に変わっていることが示された。これに関しては、前述した利用者との関わりや保育士からの指導の少なさが影響していると思われる。また乳児院との間では差が認められていないが、これに関しては、乳児院に関しては、事前の学習で映像の資料等も用いて指導を行っている点、学生はすでに保育所での実習を終えており、乳幼児に関してはある程度の接触経験がある点などの影響により、乳児院に対しては実習前から肯定的なイメージを持っていたため、実習を経ての変化がそれほど大きく出なかった可能性も考えられる。

(3) 実習施設種による利用者の理解の差異について

分析の結果、障害児の理解に関しては、障害児支援施設での実習が他の施設と比較して、より障害児の理解を促すことが示されていたが、これは障害児を支援するための施設での実習であることを考えると当然の結果であると思われる。しかし一方で、母子生活支援施設と比較して児童養護施設での実習がより障害児への理解を促すという結果も示されていた。これに関しては、厚生労働省によるH25年児童養護施設入所児童等調査結果によると児童養護施設には、何らかの障害を抱える児童が28.5%いることが報告されており、そういった状況の中で児童養護施設での実習においても何らかの障害を抱える児童と関わる経験や指導を受ける中で障害児に対する理解が促されたのではないかと考えられる。

また「②社会的養護の対象となる子どもについて理解が深まった」に関しては、施設間での差は認められなかった。これに関しては、障害児支援施設の利用児においても社会的養護として入所をしている児童も少なからず存在しているため、どの施設種においても社会的養護の対象となる児童についての理解が促されたと推察される。

次に保護者支援のあり方については、児童養護施設と比較して母子生活支援施設での実習の方が促されることが示された。これに関しては、母子生活支援施設は、施設内に母子が生活しているため、施設の方針としても母子への支援が重視されていることが多いことが影響していると思われる。一方、児童養護施設においても保護者や家庭の支援が重要であるとされているが、実習生として施設に入らないうちは、中々実際の保護者支援について触れることが困難であると思われる。また乳児院に関しては、児童養護施設同様に保護者支援が重要であると考えられ、家庭復帰のための保護者支援が盛んに行われており、障害児支援施設においては、通所の施設の場合は、保護者の送り迎えがあり、また入所の施設においても定期的に家庭への外泊を行っている場合もあり、そういっ

た点で保護者への支援に直接的でなくとも触れる機会があったのではないかと考えられる。これらの理由により、乳児院と障害児支援施設に保護者支援のあり方の理解は、母子生活支援施設と有意な差が出ない程度に促されていたと思われる。保護者支援や保護者対応について、実習の中で学びを深めることに関しては、藤重(2014)は「養成校での学びとしては限界があるように思われる」とも述べており、その点に関しては、特に母子生活支援施設での実習の中でより学びを深めることが出来ると思われる。

5. まとめと今後の課題

本研究の結果より、実習先の施設種により、学生の学びや体験に差があることが示された。乳児院と児童養護施設は、対象となる年齢が異なるが、社会的な機能としては、同様の施設となる。そのため学生の学びや体験としても、両者の施設間においては大きな差は見られず、乳児院と児童養護施設における学びに関しては、ある程度の共通性があると思われる。しかしながら他の施設種との比較において、どちらか1つの施設のみが他の施設との間に差が見られた結果がいくつか見られていた。そこから推察するに、乳児院と児童養護施設での学びと体験の特徴としては、①子どもとの関わりや保育士から直接的な指導を受ける経験を積める、②社会的養護の対象となる児童の理解が促される、③乳児院では保護者支援についての理解を、児童養護施設では障害児についての理解を深めることが出来る、という点があると考えられる。乳児院や児童養護施設では、子どもとの直接的な関わりの中で、子どもとの関わり方を学び子どもの理解を深めることが可能になると思われる。ここで両施設での学びに共通性があると述べたが、①に関しては、対象となる子どもの年齢層が違うため、乳児院では乳児期の子どもの保育技術を学べ、児童養護施設に関しては、幼児から学齢期の子どもの理解と関わり方について学べるという面では、異なっていると思われる。今回の研究では、そういった細かな学びの内容については検討が行っていないので、今後はそれを含めて検討していくことが必要になると思われる。

次に母子生活支援施設に関しては、考察中にも述べたように、同じ施設種であっても、施設により実習内容が異なることがあるため、施設種の特徴として考えることは困難な面もあると思われる。その中でも、①直接的な関わりや保育士からの指導を受ける経験は他の施設種と比べると少ない、②保護者支援についての理解については、他の施設種と比較してより深めることが出来る、という特徴があると考えられる。この保護者支援について

の学びを深められることは、他の施設では得難い貴重な学びであるが、施設により実習内容が異なる点や保育士からの直接の指導を受ける経験が少ない点を踏まえた場合、施設への実習依頼や事前指導の段階で、それぞれの施設で実習内容、職員配置について把握しておくことが必要になると思われる。その上で、それぞれの施設においてどのような学びや経験が得られるかを学生に事前指導を行うことも学生の学びを促すために検討することが必要であると考えられる。

そして障害児支援施設については、①直接的な関わりの経験や保育士からの指導を多く体験できる、②障害児についての理解を深めることが出来る、③社会的養護の対象となる子どもの理解や保護者支援についても理解を深めることが出来る、④施設に対してのイメージをより肯定的に変化する体験となる、という特徴があると考えられた。障害児支援施設での体験の特徴として、施設に対してのイメージをより肯定的に変化することがあるが、これに関しては、障害児や障害児支援施設に対してのイメージが実習前には肯定的なイメージが持っていなかったために、よりその変化が顕著に表れた可能性も考えられる。そのように考えた場合、施設に対しての肯定的なイメージの変化を実際に行きに行くことに期待するだけではなく、事前指導の段階で障害児や障害児支援についての適切な理解の促しをすることも重要になると思われる。

今後の課題としては、以下の点が挙げられる。①同様の施設種であっても、実習の内容が異なる場合があり、その点についての詳細な検討が必要、②障害児支援施設について通所と入所の施設や主として対象とする障害種による学びに差異があるかの検討が必要、③データが得られなかったため今回対象としていない施設での実習に関しての学びについても検討を行うことが必要、④学び、体験のふり返りに、実習終了後からの期間が影響を及ぼすのかについての検討を行うことが必要。今後は、上記の課題を踏まえて継続しての研究を行い、学生の実習における学びについてより詳細な検討を行い、有効な実習指導についての検討を行っていく。

引用文献

藤重育子（2014）保育実習における学びと課題—施設実習後の学生の振り返りから—、東邦学誌、43(2)、160-170

池田幸代・田中謙・前嶋元（2013）保育者養成校の施設実習における学生の学びの内容の分析、高等教育と学生支援：お茶の水女子大学教育機構紀要、4、54-61

石山貴章・安部孝・田中誠（2010）保育士養成機関における「施設実習」の現状と課題（Ⅱ）—実習事後指導を通した

「自己評価」と「気づき」に関する分析から—

大和田明見・関根美保子・鈴木春江（2014）保育士養成課程における施設実習の意味と意識の変化、帝京大学教育学部紀要、2、275-284

多田内幸子・重永茂（2014）施設実習の前後での本学幼児教育学科学生の意識調査、久留米信愛女学院短期大学研究紀要、37、69-76

土谷由美子（2006）施設実習に関する意欲と現状についてⅡ—学生のアンケートを中心に—中国学園紀要、4、85-90

山口直範（2007）養護施設実習における短大生の心的発達効果、岡山短期大学紀要、30、79-82